巻頭言にかえて

―― シェークスピアと坪内逍遙 ――

川　津　孝　四

本年は Shakespeare 生誕400年祭に当るので本邦に於ても，Richard 三世や Hamlet が上演されたり，記念の催が色々あった。本校でも6月上旬に記念講演会を開催することにした。私も「Shakespeare と坪内逍遙先生」と題して講演する予定であった。然し私の欧米への研究視察旅行の日程を延期することも出来なかったので6月10日開催に決定した同記念講演会の事が，本学英語英文科の責任者として非常に気になり乍らも，遂に六月六日に羽田空港を出発し，香港，バンコック，カルカッタ，テェイラン，ベイルートを経て，伊太利，フランス，スイスに各々十日程滞在の後英国に渡った。London, Cambridge, Oxford 等の諸大学を訪ねるよりも前に Shakespeare の生地，Stratford-upon-Avon へ行った。今年は生誕400年祭とあって，世界各国からの観光客や研究視察の為めに此処を訪ねる人の数は格別多いらしい。Shakespeare の生家は勿論，彼の妻 Anne Hathaway の生家，それに Sakespeare が学んだ Grammar School や彼の葬られている Trinity Church, Avon 川沿いにあるこの大劇作家を記念する Memorial Theatre へも行った。生誕日の4月23日からはもう大分日も経っていた訳だが，この町全体にまだ400年祭の気分が満ち満ちている様であった。

London に帰ると British Museum で Shakespeare の特別陳列を見た。この陳列は Museum の入口から右へはいって直ぐの所にある部屋(諸文豪の筆蹟や Old English, Middle English の古文書のある部屋) に

続く部屋で天井の高い左右の壁面が全て書棚でぎっしり書物の並んでいる長くそうして広い部屋であった。入口には

William Shakespeare 1564—1616
Christopher Marlowe 1564—1593

An exhibition of books, manuscripts, maps, music and other illustrative material chosen from the Museum's collections, in honour of their quatercentenary.

と書いてあった。同年生れの大学出の才人 Marlowe の記念展も共に催されていた訳である。でも特別陳列はその部屋の中に置かれた幾つかのガラス張の陳列棚であり陳列ケースであって，無暗に沢山列べたのではなく，世界各国に於ける主な Shakespeare 関係の文献を重点的に陳列したものである。その数はむしろ少な過ぎると思う位であった。これはと云う特に顕著なものを選んだのである。

その中に日本人としては唯一人坪内逍遙先生のがあった。其所に展示してある本は早稲田大学出版部発行の逍遙訳の Shakespeare 全集中の Hamlet の初版で，Hamlet の絵の処を開いてあり，次の様なことが白い大きなカードに書かれて掲げられていた。

Hamlet. Translated by Tsubouchi Yuzo. Tokyo, 1909.

This was the first volume of Dr. Tsubouchi's translation of the complete works of Shakespeare, the last volume, containing the *Sonnets,* appearing in 1928. Dr. Tsubouchi was also the leader of an experimental theatre group, the Literary Association (Bungei Kyokai), which performed *Hamlet* a number of times. The revival of 1911 in particular exercised considerable influence on the development of the modern Japanese theatre.

私はその硝子張りの特別陳列棚ケースに寄りかかり乍ら，ありし日の恩師坪内逍遙先生を追憶していた。

私が早稲田大学に学んだ頃は先生は既に正規の教授の椅子からは引退して居られたが，幸にも文化事業研究会と云う会が出来て，先生も相当長い間継続して講義して下すった。Shakespeare の講義もあったが，「真夏の夜の夢」の Text を使ったりして劇の本読みを懇切に指導して下すった。私は個人的にも色々御世話になり，親しく接する事が出来た。

その後私は早稲田で教授する旁ら，「英語と英文学」と云う月刊の研究雑誌の主筆をしている時，坪内先生が Shakespeare 全集の翻訳を完成出版されたのを記念して，坪内博士沙翁全訳記念号を出した。

先日私は本学での英文学史の時間に Shakespeare の講義をする時学生諸氏にもお見せする為久し振にこの雑誌をさがし出して見て，感慨無量であった。この特輯号は昭和3年の11月号であるから今から36年も前のことである。坪内先生からも，「疑問の団塊扱いにされるシェークスピア」と題する原稿を送っていただいた。これは当時雑誌としては最も多く読まれて居り，原稿料も最も多く支払う「キング」と云う雑誌から依頼されて，既にその雑誌社へ送附していたのを急ぎ取りかえして更に筆を加えて私の方へ廻してくださったものであった。その先生自筆の原稿は二度も戦災に会った私にとっては不思議な位幸運にも今尚お手もとに残って居り，大切にしている。逍遙先生以外の執筆は五十嵐力の「古稀の坪内先生」，宮森麻太郎の「沙翁翻訳者としての坪内博士」，平田禿木の「沙翁に就いて」，日高只一の「坪内先生の沙翁劇の研究と翻訳の態度」，宮島新三郎の「坪内先生の沙翁完訳事業」，松居松翁の「日本国民と沙翁劇」，山岸光宣の「シェークスピアと独逸文学」，花園兼定の「バリモアのハムレット」，川津孝四の「ハムレットと云う花園に入りて」等であった。それ等の執筆者は私を除いて坪内逍遙先生を始め全て今は故人となっている。

尚おこの特輯号の巻末に私が書いた編輯後記の中から次の一節を引用してみよう。

『坪内逍遙博士四十年の苦心によって沙翁の作三十七種を悉く翻訳し，尚お其の上にシェークスピア研究栞を近日脱稿されんとす。時恰も坪内演劇博物館の竣成近く，且つ本年は先生の古稀に相当す。重ね重ね目出度き極みである。

沙翁全訳を祝して，

大いなる峰の姿をそのままにうつして深し山の湖。

古稀を祝して，

花椿君がよわいの数しれず重ねて咲かむ熱海湯の里。』

（註　先生は熱海に住居して居られ，また花の中でも椿が一番お好きであった。この二首の歌は私が色紙に書いて先生の熱海のお宅へお祝に御送りした。）

上記の坪内先生を記念する演劇博物館が早稲田に竣成の後間もなく「日本シェークスピア協会」の発会式が大隈会館で開催された。この協会の設立に坪内先生の御意志が表わされているのは尤よりであるが，人から自分が賞讃されたりするのを眼の前で聞くことは余り好まれなかっただろうし，他にも御都合もあったためか，兎に角坪内先生は発会式当日出席されなかった。早大関係者では総長の高田早苗さんが話をした。当日は英国大使も来賓として出席挨拶され，当時の日本に於ける主な英語英文学者は殆んど参加し，その内の幾人かは話をした。当日の話手は一人のこらず全部の者が沙翁をたたえると共に坪内先生の偉大な業績を賞賛し敬意を払い祝福した。私は日高教授を助けて世話役として多忙であった。

この協会は沙翁劇の上演もやり，パンフレットも出したりして，なかなか盛大に幾年か活動していたが，何時の間にかとだえてしまった。最近新しくシェークスピア協会が出来ているが，若い方など昔のこうした協会の事をご存じない者も多い事と思う。当日話された高田さんは大隈内閣の時文部大臣を務めたりした政治家でもあったが，早稲田で坪内先生よりも先にシェークスピアの講義をされた事もある。この発会式の際の講演をパン

フレットに掲載する為私は数日後更めて高田先生の御宅へ行って再び話をくりかえして貰い，それを速記した。Milton の詩の On Shakespeare などちゃんと暗誦して居られた。発会式の記念写真は戦災で焼けた大隈会館の書院の南側廊下の処で英国大使を真中にして撮影した。この発会式がいつ開催されたかはっきり覚えて居なかったのでその写真を見つけ出して，裏面を見ると昭和5年4月23日撮影とある。つまり今から34年前の Shakespeare 生誕日に当っていた。

本学に英語英文科が創設されて3年目であるが，幸い教師も学生も研究の熱意に燃えて居り，今度，関係の教職員と学生及び卒業生を会員として「英米学会」を設立し，その研究発表機関誌として「英米学研究」を発行するに当り，以上をもって，巻頭言に替えた訳である。